

新選組旅行記

ボクはできるだけ自分を省みるよう、心掛けたと思っています。自分を省みること日々尊大になりがちな虚栄心に釘を刺す。自己内省で得られることは「自分のいたらなさを謙虚に受け止める心」だと思っています。

ボクにとっての自己内省の場は2つあります。その1つ目は滝です。厳しさの中でしか味わえない美しいものを愛でることの妙味を知るとともに、自然の大きさや厳しさには敵わないことを、身を持って実感しました。そして2つ目は、歴史に興味を持つということです。

去年の12月仕事で東京に行く機会があり、休日は新選組の史跡巡りに繰り出しました。今回は東京都調布市と三鷹市の端境へ。ここは新選組局長、近藤勇の生まれ故郷です。

調布市野水には近藤勇生家跡があります。近藤は天保5(1834)年10月9日、武蔵国多摩郡上石原村の農民官川家に生まれました。幼名は勝五郎といいます。官川家も土方家と同じく名字を許された格の高い農家で、敷地には剣術の道場も備わっていたようです。ここに、天然理心流剣術三代目、近藤周助が出稽古に来ていた。子がいなかった周助は勝五郎を周助の実家島崎家の養子にもらい受け、勝五郎は島崎勝太と改めて、後に正式に四代目を襲名し近藤勇を名乗りました。生家跡には残念ながら土方歳三生家跡のように当時の面影を伝えるものはほとんどなく、「近藤勇産湯の井戸」と小さな祠を残すのみとなっています。

近藤勇生家跡から徒歩2分くらいの三鷹市大沢に龍源寺という曹洞宗の寺があります。この寺は官川家の菩提寺であり、ここに近藤の遺体が眠っているとされています。それには次の興味深いエピソードがあります。近藤勇は慶応4(1868)年4月25日、板橋で官軍により斬首されました。その首は京に送り三条川原でさらされることになりましたが、一方の胴は板橋の刑場で埋葬されていたのを勇の兄、宮川音五郎とその子(勇の甥)勇五郎、そして親類の弥吉が番人に3円包み、遺体を掘り起こして龍源寺に移したらしいです。逆賊の汚名を着せられている勇です。この遺体を取り返すことはかなり危険です。近親者だから、お答めなし、ではない。近親者なら尚のこと、罪人の手助けをしてきた者として、お縄になり兼ねない。また、罪人の遺体に情けをかけるために掘り起こすなど、官軍の裁きに異を唱える者として扱われてもおかしくありません。この行動には相当な覚悟があったと思います。故郷に帰してやりたいという、近親者の強い信念が伝わってきました。そのような思いの中、お墓を拝んできました。同じコミュニティーの人間の力を感じました。

今回は時間の都合で一箇所しか行けなかったということや、土地の食べ物を楽しむこともできず、また、大雨に遭うという具合でかなり残念だったのですが、お墓の前ではビショビショになりながらも心安く拝むことができたので有意義でした。

先人がどうい経路を辿って、ボクが生きている現代に繋げているのか。これを興味のあることから知りたい。それはつまり自分のルーツを探ることになると思っています。また、先人よりもいたらないことの多い現代人であるボクは、指針を持ち、感じたことを自分に昇華できるんじゃないか、とも感じます。そして、やはりボクは、強い信念を持った人間でありたいと感じた旅でした。誠
(楠田 行展)

[龍源寺・近藤勇生家跡]

交通: JR三鷹→バス龍源寺前(20分)

※龍源寺は生家跡の次に参る方がベター

寺近くには蕎麦屋もある

極私的ハウス嘯: LARRY HEARDの巻

暖冬とはいえやっぱり1年のうちでもっとも寒いこの時期ですが、みなさん素敵な音楽ライブを過ごしていらっしゃいますか? キャンプからオープン戦、そしてセンバツがプレイボールとなれば季節は春。梅も桜もすぐです。さて、久しぶりのこのコラム、何を書こうかと考えつつ、昨年出版された『超ハウス・ディスク・ガイド』という本をつらつらと眺めておりました。この本は約2000枚ものレコード・CDを掲載し、70年代のソウル/ディスコから最近のものまで幅広く押さえた、なかなか読み応えのある一冊ですんで、見かけたら手にとってみて下さい。で、その本を見ながら「あ〜、コレ欲しいなあ」とか「おっ!?アレは載ってないやんか!」などとぶつぶつ言いながらばらばらページを繰りながら聴いていたのがMr. fingersの曲だったんで、じゃコレにするかという簡単な理由から、今回はラリー・ハードさん(Larry Heard)のこでも書いてみようと思います。

なんでMr. fingersからラリー・ハードになるのかといいますと、Mr. fingersというのがラリー・ハードのソロプロジェクトの名前だからだそうです。ほかにもFingers inc.とかThe Itという名前でも活動したり、ラリー・ハード名でもいくつかのリリースを残したりしているのですが、自分ひとりなのは何でMr. fingersなんていう変わった名前をつけたのでしょうか、ラリーさん。

ハウスという音楽の誕生は1977年にシカゴのwarehouseというクラブでの盛り上がりとその起源とするというのがまことしやかに語られる通説で、ラリー・ハードはそのシカゴの地でハウス誕生初期から活動しており、Mr. fingers名義ではCan You Feel Itというハウス史に輝く名曲を残しております。シカゴ・ハウスの特徴という反復する機械的なキック音に語りやリフレインがのっかるころにあるのですが、ラリー・ハードの曲は反復する機械的なキック音のうえに叙情感溢れるメロディが奏でられるところが最大の持ち味で、特にこのCan You Feel Itという曲は耳に残る特徴的な旋律が、ヴォーカルやオーケストラには無い独特の憂いを届けてくれます。

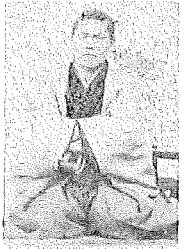
好きな音楽のグッとくるポイントは歌詞だったりメロディだったりイントロだったり、人によって違うものだと思うのですが、Can You Feel Itという曲はそのメロディとタイトルだけで思わずフロアで「イエース」と声が出てしまうほどの名曲です。時々かけますんでヨロシク。
(itaru waku)

next collectitve

次回collectiveは
2007年初夏を予定しています。
お楽しみに!

http://www.geocities.jp/collective_web/

パーティーやpress collectiveについてのご意見・ご感想をお待ちしています! 皆でもっと楽しいパーティーを作りましょう。
上記WEBサイトから皆さんの声を聞かせてください!



press collective

皆様、ご来場ありがとうございます。collectiveは今回でめでたく10回目を迎えました。今後ともヨロシクです。以前、僕はこのコーナーで良質のネットラジオ番組を紹介しましたが、今回はpodcastです。Apple社のソフトiTunesに馴染んでいる方は既にpodcastの存在をご存知かもしれませんが、まだまだ活用していない人も少なくないと思い、紹介する次第であります。

僕は兼ねてからダンスミュージックの妙味を、その「素人感覚」にあると考えています。創造性や技術面においてはプロフェッショナル域に達しているものも多々ありますが、こと経済面においては随分緩やかな側面がダンスミュージックの作り手に散見されます。大手のレーベルに所属し、収益を手堅くgetしようとするアーティストがいる一方で、収益より音楽をenjoyすることに比重を置くアーティストも少なくありません。また、収益をたっぷり得ながら、その一部を無料でリスナーに楽しんでもらうためのフリーコンテンツを設けるアーティストやレーベルもあります。

ダンスミュージックの世界はインターネット技術の進歩によって大きくインヴェンションされ、その公益性は一気に開花しました。ネットラジオはその一つの試みだったと思いますが、この数年で急激に広がりを見せているpodcastはネットラジオを技術レベルにおいて更に進化させた代物です。噛み砕いて説明すると、Apple社のiTunesにウェブ上で公開されている番組を録音して、収集した音源を好きなときに聴取するシステムということになりましょうか・・・ iPodなどのポータブルプレーヤーがあれば、オーディオファイルとして持ち歩くことも可能。podcastのコンテンツはプロ/アマ問わず作成することができるのですが、今回はレーベル紹介も兼ねつつ、質の高いコンテンツの一つを推奨します。

“stones throw podcast”

<http://www.stonesthrow.com/jukebox/>

stones throwはPEANUT BUTTER WOLFがオーナーを務めるアメリカ西海岸のレーベル。blue note音源をリメイクした素晴らしい作品を作ったアーティスト、MADLIBなんかも、このレーベルのクルーです。アンダーグラウンドなHIP HOPからレアなFUNKの再発まで、そのクールでいてマニアックな審美眼は他のレーベルとは一線を画しています。ブラックミュージックのもつマッチョさがあまりなく、全ての作品に通底しているオタク的精神はアメリカよりも日本の方がウケがいいのではないのでしょうか。stones throwの番組で皆様には是非チェックしてほしいのが先日世界した稀代のトラックメイカーJAY DEE(享年32歳)と、「ゲロッパ」でお馴染みのキング・オブ・ソウルことJAMES BROWN(享年73歳)の追悼番組。世界中で愛された二人の功績を最高のDJ陣がミックスプレイで追悼。情念こもっています。これらを無料で配信するstones throw。「懐の深さは暗なみ」?

R.I.P. JD&JB

こいつをきっかけにpodcastライブを満喫していただきたいわけですが、僕たちcollectiveがホームページでpodcastを導入することも夢ではありません。ウチには優秀なエンジニア兼オーガナイザーがいるのだから。頼むぞkengo。
(tawaki)

先日、京都のMETROでトンコリ奏者であるOKIのバンド「OKI DUB AINU BAND」のライブを見ました。トンコリというのはアイヌ民族の弦楽器で、独特のトランシーな響きをもっています。北国の楽器トンコリと、南国生まれのダブの出会い・・・

ダブというのは、ざっくり言えば、ジャマイカ生まれの音楽編集処理技法であり、今や音楽のジャンル名と言ってもいいでしょう。マルチトラックでレコーディングされたレゲエの歌の伴奏の各パートの音を抜き差ししたり、ディレイ(やまびこ効果)やリバーブ(残響・・・お風呂場での声の響きみたいなもんです)というエフェクトをかけたりして、音に陰影や空間性を与え、音響的快感を増幅する手法自体、もしくはそういう手法を用いたサウンドのことを指します。トンコリの響きは浮遊感があってダブとも相性がとてもよいです。

僕は彼のソロ・トンコリ・ダブ・アルバム“DUB AINU DELUXE”で初めて聴いたのですが、そのときはソロで、今回はバンド。バンドな分だけ派手になっています。バンドのメンバーにはエンジニアとして内田直之(Dry & Heavy/Little Tempo等)が参加していたので、ライブでのダブ処理(ダブワイズ)もばっちりです。今回初めて生のトンコリを見ましたが、思ったよりも大きい。1mはありそう。そして驚くべきことにトンコリがオール電化されているのです。うしろにコードをさしています。エレクトリック・トンコリ。かっこいい！そしてアイヌ語や英語や日本語での歌があり、レゲエのリズムがあり、ダブの音響があり、カラダが揺れます。ああ、かっこいい！アンコールでは1曲だけ、トンコリ一本でアイヌの伝統曲を弾いてくれましたが、実にdeepでかっこよかったです。

あの生トンコリの響きにすっかり魅了され、トンコリを習ったりできないものかと思ってインターネットで検索してみたりしていますが、北海道ならまだしも関西ではなかなかなさそうです。collectiveのメンバーのitaru wakuiに京都にある老舗の民族楽器屋さん(民族楽器屋)に連れて行ってもらう、トンコリがいないか店員さんに尋ねてみましたが、生憎扱っていないとのことでした。トンコリは相当高価なものらしく、まず入荷されることはないようです。本物は弦が鹿の腱でできているそうです。装飾とかも手が込んでそうです。

欲求というものは抑圧されればますます高まるもの。検索を続けていると、北海道のアイヌ民族博物館ではレプリカトンコリの販売をしているらしいという記事がありました。「練習用トンコリ」は9000円と安いのですが、写真を見ると、装飾もまるでなく、イケてないトンコリです。「実寸レプリカトンコリ」は90000円と高価になります。こちらはカタチなどはだいぶそれっぽいのですが、やはり装飾がなく、偽物感たっぷりです。うーむ。やはりマイナーな楽器なのでそうやすやすと本物にたどり着くことはできなさそうです。トンコリへの道は険しい。
(kengo)

※録音は少し古いですが、インターネットラジオのある番組でOKIがしゃべったり曲をかけたりしていました。トンコリの響きを聞いてみたい方はぜひチェックを。

<http://www.kisar.jp/okilive/index.html>

OKIのWEBサイト <http://www.tonkori.com/>



collectiveはいわゆるナイトクラブとは違うアプローチのパーティーですが、私yuは深夜から明け方にかけて行われる夜のパーティーをこよなく愛する人です。あえてクラブやバーで開かれるパーティーには、そこでしか生まれない感受性や、時の流れ、人とのコミュニケーションがあり、それが何より面白いと思うのです。

人間、十人十色と言われるように、パーティーもこれまた色々なわけでも、なかなか自分にしっくりくるパーティーと出会うのは難しいという現状があります。かかる音楽がアッパーからダウナーまであるように、お店の雰囲気も様々。デカバコもあれば小バコもある。レーザーがキュンキュン攻めてきてスモークがモワーンときちゃっやうお店もあれば、ミラーボールが回ってるだけ、果ては真っ暗なお店まで・・・

そして、パーティーに集う人たち。フロアの空気。どの要素で判断しようとしてもどれかが欠けるとちよつと違うなって感じに思うし、人それぞれ、巡り合わせ。しかし、あえて今回は主観を頼りにしてみます。今まで遊んできた中でも特にステキだなと思えるパーティーを、自分勝手な言葉遣いながら、少しばかりご紹介いたします。

1.brankett@FLATt

普段から私と交友の深い方は十二分にご承知のことと思いますが、まずオススメするとすればこのパーティーでしょう。arata君、hankyoさんは、前回、前々回のcollectiveでspecial featureさせてもらいましたが、本当にこのパーティーはDJ一人ひとりがオリジナルで、なおかつ刺激しあう関係が読み取れ、それでいて開放的な空間があります。遊びに来た人がみんなバカ笑いでいる感じ。あったかくて、スノッパな空気がないところ。場所が四ツ橋の老舗小バコFLATtというのもしっくりきます。オールジャンルじゃなくて、オールミックス。ハウス、デイスコ、ソウル、ヒップホップ、レゲエ、ダブなど、独自のセンスで盛り付けてくれます。あえて形容するなら「いちいちヤバイ」。フロアを忘我の境地へと誘った昨年7月のishimura君のプレイは伝説。宇宙旅行へ、いざ行かん。不定期開催で、だいたい21時から翌5時。

2.future classic@noon

「月曜の夜から終電まで」という他にはちよつとないポジショニング。これがまた病みつき。今週もなんだか頑張れちゃいそう。ビタースウィートなひと時に浸ってるなと思ってたら、知らん間にI'm so hot.な自分再発見って感じで。オーガナイザーのmitsuki君のDJプレイは、「いつかどこかのあんな気持ち」にすつと入ってくる。多分、人それぞれのね。moanyuskyこと小野君のライブは彼の脳内に広がるものに対する誠実さが感じとれる。混沌としているが、開かれている。noonの近所にあるご飯のおいしいカフエcolors製、「愛のパープルサンドイッチ」も売られている。18時から23時で奇数月の最終月曜に開催。

まだまだ続くのか、このレビュー！まずは、この2つのパーティー、現地確認してみよう！
(yu)